【公報種別】特許法第１７条の２の規定による補正の掲載
【部門区分】第３部門第２区分
【発行日】平成19年6月7日(2007.6.7)

【公開番号】特開2006-131543(P2006-131543A)
【公開日】平成18年5月25日(2006.5.25)
【年通号数】公開・登録公報2006-020
【出願番号】特願2004-321768(P2004-321768)
【国際特許分類】
Ａ６１Ｋ　８/00　(2006.01)
Ａ６１Ｑ　19/00　(2006.01)
Ａ６１Ｋ　８/72　(2006.01)
Ａ６１Ｋ　８/96　(2006.01)
【ＦＩ】
Ａ６１Ｋ　7/48
Ａ６１Ｋ　7/00　J
Ａ６１Ｋ　7/00　K

【手続補正書】
【提出日】平成19年4月17日(2007.4.17)
【手続補正１】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【特許請求の範囲】
【請求項１】
１）海泥、海藻抽出物及び海洋性コラーゲンから選択される少なくとも１種以上の海洋性原料と、２）平均分子量１０万～５００万のポリエチレングリコールとを含有する皮膚外用剤。
【請求項２】
海洋性原料として、海泥、海藻抽出物及び海洋性コラーゲンを含有するものであることを特徴とする、請求項１に記載の皮膚外用剤。
【請求項３】
海藻抽出物が、フコイダンを含有するものであることを特徴とする、請求項１又は２に記載の皮膚外用剤。
【請求項４】
フコイダンの含有量が、皮膚外用剤全量に対して、総量で０．０１～１質量％であることを特徴とする、請求項３に記載の皮膚外用剤。
【請求項５】
更に、キサンタンガムを含有することを特徴とする、請求項１～４何れか１項に記載の皮膚外用剤。
【請求項６】
ｐＨが７以下であることを特徴とする、請求項１～５何れか１項に記載の皮膚外用剤。
【請求項７】
化粧水であることを特徴とする、請求項１～６何れか１項に記載の皮膚外用剤。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００２
【補正方法】変更

【補正の内容】
【０００２】
海泥、海藻抽出物、海洋性コラーゲン等の海洋性原料は、種々の陸上に希にしか存在しないミネラルなどを含有したり、陸上動物に由来するコラーゲンとは異なる生理活性を有するものが存したりしており、皮膚保湿作用を有したり、毛髪のケア作用を有するなど、皮膚外用剤の添加成分として有用であることが知られている（例えば、特許文献１、特許文献２、特許文献３、特許文献４、特許文献５、特許文献６、特許文献７、特許文献８、特許文献９、特許文献１０、特許文献１１を参照）。しかしながら、海洋性原料は、塩の存在する海洋に存在するため、塩と親和している場合が多く、これを例えば化粧水のような水性担体の存する系に配合して、塩と、海洋性原料の存在環境を変えることにより、その溶状に変化を及ぼすことが少なくなく、その結果、長期保存中に澱等を生じる場合も存し、この様な澱は皮膚外用剤としての使用上の支障は存しないが、外観上の損失となる可能性が存するので、この様な溶状変化を抑制する手段の開発が望まれていた。
【手続補正３】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００３
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００３】
一方、高重合度のポリエチレングリコールは、マスカラなどに於いて被膜特性を改善効果を有することが知られている（例えば、特許文献１２、特許文献１３を参照）が、前記の海洋性原料を含有する化粧料等の皮膚外用剤に於いて、前記海洋性原料に起因する保存条件下での澱の析出を抑制作用を有することは全く知られていなかったし、１）海泥、海藻抽出物、海洋性コラーゲン等の、海洋性原料と、２）平均分子量１０万～５００万のポリエチレングリコールとを含有する皮膚外用剤も全く知られていなかった。
【手続補正４】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００６
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００６】
本発明者らは、この様な状況に鑑みて、海洋性原料を含有する皮膚外用剤において、海洋性原料を皮膚外用剤に含有せしめ、その溶解状況の環境を変えたときに生ずる、保存時の澱等の経時変化を抑制する手段を求めて、鋭意研究努力を重ねた結果、平均分子量１０万～５００万のポリエチレングリコールを併存させることにより、この様な抑制が可能であることを見出し、発明を完成させるに至った。即ち、本発明は以下に示すとおりである。
（１）１）海泥、海藻抽出物及び海洋性コラーゲンから選択される少なくとも１種以上の海洋性原料と、２）平均分子量１０万～５００万のポリエチレングリコールとを含有する皮膚外用剤。
（２）海洋性原料として、海泥、海藻抽出物及び海洋性コラーゲンを含有するものであることを特徴とする、（１）に記載の皮膚外用剤。
（３）海藻抽出物が、フコイダンを含有するものであることを特徴とする、（１）又は（２）に記載の皮膚外用剤。
（４）フコイダンの含有量が、皮膚外用剤全量に対して、総量で０．０１～１質量％であることを特徴とする、（３）に記載の皮膚外用剤。
（５）更に、キサンタンガムを含有することを特徴とする、（１）～（４）何れか１項に記載の皮膚外用剤。
（６）ｐＨが７以下であることを特徴とする、（１）～（５）何れか１項に記載の皮膚外用剤。

（７）化粧水であることを特徴とする、（１）～（６）何れか１項に記載の皮膚外用剤。
【手続補正５】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】０００９
【補正方法】変更
【補正の内容】
【０００９】
海藻抽出物としては、特に限定されないが、通常、緑藻類、紅藻類及び／又は褐藻類に属する海藻類から抽出された海藻抽出物が用いられる。緑藻類に属する海藻としては、例えば、シャジクモ類、ホシミドロ類、ミル類、ハネモ類、カサノリ類、ミドリゲ類、シオグサ類、アオサ類、ヒビミドロ類、カワノリ類、クロレラ類、クンショウモ類、ボルボクス類等に属する海藻が挙げられ、紅藻類に属する海藻としては、例えば、イギス類、マサゴシバリ類、スギノリ類、カクレイト類、ダルス類、テングサ類、カギノリ類、ウミゾウメン類、オオイシソウ類、ウシケノリ類、チノリモ類等に属する海藻が挙げられ、褐藻類に属する海藻としては、例えば、オキナワモズク類（Cladosiphon）、ホンダワラ類、コンブ類等に属する海藻が挙げられる。特に好ましいものは、褐藻類で、中でもオキナワモズク類である。オキナワモズクとは、一般にモズクと称される褐藻類ナガマツモ目の海藻で、糸状で細く、枝の多い褐藻であり、葉状体の表面に粘質物を多く持つことを特徴としている。本発明に用いられるモズクとしては、例えばフトモズク(Tinocladia crassa)、クロモ(Papenfussiella kuromo)、オキナワモズク(Cladosiphon okamuranus)、マツモ(Analipus japonicus)、モズク(Nemacystus decipiens)等が好ましく例示できる。かかる海藻抽出物としては、水性担体による抽出物が特に好ましい。特に、熱水による抽出物や、水とともにホモジネートし、遠心分離などの操作により、水不溶分を取り除いた抽出物が好ましい。この様な抽出物において、抽出物の有効性のメルクマークとなるのは、多糖類であるフコイダンである。海藻抽出物を、本発明の皮膚外用剤に含有させる場合には、フコイダンの含有量が、０．０１～１質量％、より好ましくは０．０５～０．５質量％になるように抽出物の総量を調整して含有させることが好ましい。フコイダンの量が少なすぎると、海藻抽出物の有効性が発現しない場合が存し、多すぎると、本発明の澱抑制効果が充分に発揮されない場合が存するからである。
【手続補正６】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１０
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００１０】
海洋性コラーゲンとしては、基源動物として魚類を用い、例えば、骨、皮、腱、ウキブクロ等のコラーゲンを含有する組織を粉砕した後、水洗、希塩溶液による抽出、酸若しくはアルカリ溶液による抽出、ペプシン，トリプシンやヒアルロニダーゼ等の酵素による抽出を行い、塩析や透析等の公知の精製手段を施して、コラーゲンを精製して得ることができる。また、通常公知の方法により、「再生コラーゲン」として得ることも可能である。本発明の皮膚外用剤に於いては、かかる海洋性コラーゲンは、０．０１～１質量％含有することが好ましく、より好ましくは、０．０５～０．５質量％である。かかる海洋性コラーゲンの量が少なすぎると、海洋性コラーゲンの効果を発現しない場合が存し、多すぎると、本発明の澱抑制効果が充分に発揮されない場合が存するからである。
【手続補正７】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００１９
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００１９】

実施例１と同様に、次に示す処方に従って、本発明の皮膚外用剤である、化粧水２を作成した。このものを試験例１と同様に評価したところ、色差は０．１９であり、澱のスコアはスコア１であった。ｐＨは６．５２であった。

【手続補正８】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００２１
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００２１】
実施例１と同様に、次に示す処方に従って、本発明の皮膚外用剤である、化粧水３を作成した。このものを試験例１と同様に評価したところ、色差は０．１３であり、澱のスコアはスコア１であった。ｐＨは６．５７であった。

【手続補正９】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】００２３
【補正方法】変更
【補正の内容】
【００２３】
実施例１と同様に、次に示す処方に従って、本発明の皮膚外用剤である、化粧水４を作成した。このものを試験例１と同様に評価したところ、色差は０．１６であり、澱のスコアはスコア１であった。ｐＨは６．５７であった。これより、キサンタンガムを含有することが好ましいことが判る。